

帰る鳥よき羽の色に飛びたちて北にむかふを畔わきに送りつ  
伊藤一彦

日本の古代に、予祝あるいは予祝儀礼というものがあった。春の祭りにその年の秋にそうあってほしい豊作の祝いをするのである。この歌、「よき羽の色」と北帰行の無事を祈って予祝の思いを歌にしている。白鳥だろうか。雁、鴨のたぐいかもしれない。いずれにしても小鳥ではあるまい。

路地裏の蔦の館に道化師の白き化粧の絵の掲げあり

服部崇

転勤でパリに住みはじめた作者。パリの裏町がまだ新鮮に観じられる時期の空気が読めてうれしい。キラキラの好奇心が読めるような作。

影一つ誰か脱ぎ捨て行きぬべし昼深き野の一部が昏し  
久家基美

これまでも光と影をうたう秀歌を多く作ってきた作者である。この作のほか「彼方より見えて吾より見えぬものあらむか宙は薄く霧らへり」等の今月号の作は、私たちの目が認識する光と影のドラマを、深くゆつたりと表現していて、心に残った。

清国の風景絵葉書信綱より於菟少年に届きし四枚

経塚朋子

今月の一連は、森鷗外記念館の展示品に取材した作。於菟少年は明治二三年生の鷗外の長男で、後に医学者となる。信綱が清国時代の中国旅行をしたのは明治三六年

## 短歌の現在

No.388

## 今月の15首を読む

### 佐佐木幸綱

だから、少年は十三歳。名詞を多くして、ドキュメントタッチを表に出す工夫が読める。

喪服などいらぬ国なり銀いろの遣らずの雨の降らぬ国なり  
クリシュナ智子

米国との風土風習の差違を、他者との関わり方なしぼつてさらりと表現している。「喪服」に「遣らずの雨」を合わせた感覚、なかなか。

地下深く白き眩きホーム成り古き駅舎は解体を待つ  
谷岡亜紀

今月の八首は、新しい場所にプラットホームを移行した小田急線下北沢駅に取材している。移行工事は夜中から明け方まで行われたようだが、レールを外す作業等を長い時間ずっと眺めて取材したらしい。空気がして時代の移りが読めるところがポイント。「ホーム」はプラットホームの意味。

濃淡のままに翳りて稜線に沿う道はるか帰る家ある  
青木泰子

上旬の険しい山巒の表現は、日本の山ではなく、私はほとんど知らないが、岩石むき出しの米国の山のイメージらしい。つまり、ここでの「帰る家」は日本の家ではなくアメリカの家らしい。「帰る」という語に、重い思いをこめた一首と読む。

近づいていけばいくほど雲離れ遠い水平線だ、読者は  
加古陽

新聞記者にとつての読者、そのとらえどころのないイ